

中学生を対象とした「いのち」の授業と家庭内対話の促進  
筑波大学附属中学校 教諭 多田 義男

### 1. 授業の内容（学習指導案およびそのポイント）

本授業は、中学校学習指導要領解説『特別の教科道徳編』（平成 29 年告示、文部科学省、2018 年）（以下、道徳学習指導要領）に基づき、「生命の尊重」を主題として実施したものである。道徳学習指導要領に示される道徳科の目標では、「道徳的諸価値について、理解を基に自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲及び態度を育てる」とされている。

本授業における中心的な道徳的諸価値は「生命の尊重」であり、「命の大切さ」を理解し深めることを目指した。具体的には、インフルエンザ脳症により脳死と判定された女兒 A ちゃんとその家族の手記を教材とし、生徒に対して次のような問いかけを行った。

- ①命が有限であることを改めて受け止め、A ちゃんとその家族の思いに心を寄せること
- ②「自分が生きている」という当たり前のことを見つめ直し、自己を見つめること
- ③多角的な視点から生命の意味や重さを自分ごととして考えること

これらを通じて生徒自身が生命の尊さを実感し、自己を見つめ直すことで、道徳的判断力や心情、実践意欲の育成を目指した。

授業構築において最も重視したのは「何を生徒に問うか」である。

臓器移植の是非を議論させたり、死への恐怖や悲しさを過剰に強調したりするのではなく、価値判断を押し付けることなく、生命の尊さそのものに目を向けさせることを心がけた。

教材のポイントとしては：

- ・A ちゃんが誰かの体の一部となってこれからも生き続けること
- ・嘆きの中でも死を受け止め、共に生き続けようとする家族の姿

の 2 点である。

これにより生徒は、単なる悲しみの共有にとどまらず、「弱さを抱えながらも強く生きる」という人間の気高さに気づくことができた。この「気高さ」は、道徳科の内容項目における「よりよく生きる喜び」にも相関し、生命尊重のみならず、多面的・多角的な価値理解へとつながる重要な視点である。

また、授業で紹介した家族の手紙からは、A ちゃんへの深い思いとともに、家族の愛情の深さを感じ取ることができ、生徒一人ひとりが「命をつなぐ」ことの意味を自らの生活と結びつけて考える契機となった。

さらに授業後半では、意思表示のコミュニケーション支援ツールを活用し、生徒同士でペアを組み、自身の考えや認識を言語化する活動を行った。これにより授業内容を家庭に持ち帰り、保護者との対話を促進するきっかけともなった。臓器移植という非日常的なテーマを超えて、「自分はどう生きるか」という根源的な問いに向き合う動機付けとなった。

### 2. 授業構築における留意点

本授業では、臓器移植という重いテーマを扱う際に、生徒の心情に過度な負担を与えないこと、価値観の押し付けを絶対に避けることに細心の注意を払った。

具体的なこととして、

- ・教師自身は中立な立場を堅持し、賛否を問うのではなく「生命の尊重」を考える授業とした。
- ・科学技術の進歩と倫理的課題をバランスよく扱い、偏った理解を防いだ。
- ・公的機関が公表した信頼性ある教材を使用し、安心して考察できる環境を整えた。

生徒同士の対話を重視し、異なる考えを尊重し合う授業構成とした。

これらの工夫によって、生徒自身が自己を見つめ、多角的に考える力を養うことを目指した。

### 3. 意思表示のコミュニケーション支援ツールの活用とその効果

授業後半では、意思表示のコミュニケーション支援ツールを用いて、生徒同士がペアを組み、自らの考えを整理し、相手に伝える活動を行った。

このツールは、「臓器移植に関して自分がどう考えるか」「その理由は何か」「実際はどのようなになっているか」といった問いに沿って、段階的に思考を深めていく設計になっている。使用にあたっては、まず教師から「互いの考えを尊重し、否定しない」というルールを丁寧に説明し、生徒同士が安心して意見を交わし合える環境を整えた。活動中、生徒たちはツールのガイドに従いながら、自らの臓器移植に対する考えを言語化し、ペアの相手と共有した。

この過程で生まれた主な効果は以下のとおりである。

- ・曖昧だった臓器移植についての知識が整理され、自分なりの立場や理由を整理することができた。
- ・相手の意見に耳を傾ける中で、自分とは異なる考え方があることを自然に受け入れ、多様な価値観への寛容さが育まれた。
- ・異なる立場に直面した際にも、安易に否定することなく「なぜそう考えるのか」を尊重する態度が芽生えた。
- ・授業での対話が家庭へと広がり、家族との自然な会話のきっかけになった。

帰宅後、「今日の授業で臓器移植について考えた」「自分はこう思った」と話題にしてみたいと話す生徒も多く、授業内容が家庭内で共有される例が見られた。

これにより、従来型の「授業内で完結し、感想を書いて終わる」形式とは異なり、互いに問い合い、意見を共有し合いながら学びを深めるアクティブな授業が実現した。さらに、生徒たちは「自分の思いを誰かに伝える」「相手の思いを受け止める」という行為そのものが、生命倫理の本質に触れる体験であることに気づき、授業で扱った「生命の尊重」の価値を実感するに至った。

### 4. その他（教育現場に立った視点での考察）

中学校現場では、教師たちは多忙な日常業務の中で、学習指導、生徒指導、保護者対応と多様な課題に直面している。特に、授業の意図が保護者に正しく伝わらず、不安感が生じた場合、その対応に追われることで、本来注力すべき授業準備や教材研究の時間が圧迫されるケースも少なくない。

今回の授業実践では、信頼性の高い教材と支援ツールを用いることで教育的正当性を確保し、事前に授業のねらいを丁寧に生徒・保護者双方に伝える工夫を行い、支援ツールを活用して家庭内対話を促し、保護者との協働的な学びを促進した。

これにより、教師の負担を軽減しつつ、授業本来の教育効果を高めることができた。

教育現場の制約を乗り越えながら、教師と生徒、保護者、社会をつなぐ道德教育のあり方を提示できたと考えている。

### 5. まとめ（結論）

本授業実践を通して、臓器移植という現代的かつ重層的な課題を扱いながら、生徒一人ひとりが「生命の尊重」について自己の問題として深く考え、他者と共有し、家庭でも対話を広げることができた。

特に、信頼できる教材の選定、価値観の押し付けを排除した授業構成、そして意思表示支援ツールを活用した学びの深化は、現代の道德教育において重要な実践であると確信している。